

1. 問題

我々は日常的に「失礼な態度」や「まじめな態度」など、外に現れる行動そのものに対して態度ということばを用いる。しかし、本研究では、「直接観察することはできないが、様々な対象に対して一定の仕方では反応させるような個人内部の傾向性（安藤ら、2007）」と定義される心理学で扱われる『社会的「態度」』を分析対象とした。

社会的態度の構成要素は、『「感情的成分」「認知的成分」「行動的成分」（ローゼンバーグら）』の3つの成分であるとされる。また、社会的態度は集団の影響を受けて形成される（原、2004）。つまり、「所属集団の規範、基準、価値に一致するように態度が形成される（クレッチラ）」のである（山口、2006）。また、態度は「パーソナリティと異なり、常に一定の人物、集団、物事などの対象や状況に関連している（シェフリとキャリントン）」「習慣と異なり、価値あるいは好悪の感情を伴う（シェフリとキャリントン）」「持続的な特性をもつ点で、欲求や一時的な情動状態とは異なる（シェフリとキャリントン）」ことが指摘されている（原、2004）。すなわち、態度とは個人にとって比較的安定しており、容易には変化しにくい構成概念であると言える。加えて、我々は態度が示す行動を遂行することによってプラスの現象を最大にし、マイナス現象を最小することができるという（安藤等、2007）。以上の定義から、社会的態度はその社会の中で形成されていく可塑性のある文化的側面を持つことが考えられる。

日本社会の下で形成された社会的態度と捉えられる概念は、これまで様々な視点で論じられている。まず、中根（1982）による「タテ・ヨコ」の人間関係の位置取りは対人認知の基準と考えられる。また、自分のおかれている世間や集団の状況下で利益を求める場合、他人からの攻撃や非難、トラブルを回避し、他人のいやがることはしないように自制したり（竹内、1995）、「和」として争い事を回避したりする意識（南、1980）も社会的態度と捉えられる。さらに、自己の利益を追求するとき、周りに非難されないよう、「表と裏」「ホンネとタテマエ」を使い分ける二重性の意識土居（1985；2000；2007）が挙げられる。この二重性は、「甘え」とかかわりがある。甘えは利己主義の実践を期待するものであるため、甘えることによって自分が利益を得ることは、相手に迷惑や負担をかけるという懸念から「すまない」や「申し訳ない」という謝罪と感謝の2つの意図をもつことばが使われるという。遠慮が働くのは凶々しいと非難され、相手から嫌われるのではないかという危惧があることに起因することが指摘されている。

上記のような社会的態度の反映として、日本語には、その意味・機能、形態から様々な依頼表現が存在する。宮地（1995）によると、範疇的な意味と形式とが依頼表現を多様多様なものとし、その分だけ多様な「心の壁」があるとされる。井出（1986）の研究では、

形態、語彙などの文法的観点、丁寧度、出現頻度の3つの観点とその他の表現を加えた分類が行われている。また、岡本（2000）では、直接的形式、習慣的間接的形式、非習慣的なヒントの3分類に敬語による表現を加えた分類が行われている。そこで、本研究では日本社会における態度の構成要素と言語表現の関係を実証的に分析したいと考えた。

2. 目的

本研究の目的は、「依頼」を対象とした社会的態度の構成要素とその反映である言語による依頼表現の使い分けを明らかにすることであった。依頼を対象とした理由は、依頼には、社会的態度としての規範性が期待されるからである。なぜなら、依頼は依頼者側の利益の獲得を目的として行われるため、依頼相手の意識や行動に影響を与える。つまり、相互作用としての円滑な人間関係を保持するための規範的行動が要求されるのである。社会的態度の構成要素である認知要因は、依頼相手との人間関係の距離と依頼内容が相手に与える負担の程度とした。次に、感情要因は予備調査によって明らかとなった「二面性」と定義した。「二面性」とは、「図々しい」と「遠慮する」のように概念的には相反するが、この2つの側面が表裏一体となって生起される感情を指す。そして、行動要因は依頼方略を設定した。用いられることが予測される、依頼表現においては、井出(1986)、川口(2004)、宮地(1995)、中川・小野(1996)、岡本(2000)、砂川(2001)を参考に、その意味・機能、形態から16にカテゴリ化を行った。そして、社会的態度の各構成要素と依頼表現の使い分けを検証するため、以下の2つの仮説を立てた。まず、第一に、調査参加者が日常生活で実際に経験した依頼において、認知、感情、行動の評価が高いと判断される場合、相手へ依頼表現は直接的な表現が用いられるというものであった。第二に、前記の仮説に対し、評価が低い場合には、間接性の高い意味・機能、形態をもった表現が用いられるというものであった。

3. 方法

3.1 調査参加者と調査時期

調査参加者は、日本語母語話者の大学生と大学院生561名であった。有効回答度数は514名で、性別の内訳は男性97名、女性417名、平均年齢は19.6歳(SD=1.7)であった。

調査は全て無記名で行った。講義担当者の許可を得て実施した集団回答形式と、個別配布個別回収で実施した。調査期間は2008年5月から7月と2009年9月であった。調査参加者には実施時に口答による説明合意を得た。また、実施時間は15～20分であった。

3.2 質問紙の構成

質問紙は主に「依頼内容と依頼表現の想起」「依頼相手」「対人認知」「行動評定尺度」「感情評定尺度」から構成されていた。

① 依頼経験の想起

日常生活で経験した依頼の行動を1つ想起させ（断られた場合も含む）、その「内容」

と実際に口にした「表現」を別紙の[例]を参考にして記述式で回答を求めた。なお、この設問における「内容」は行動に伴う社会的態度をより忠実に想起、評定するための援用として記述を求めたものであり、本調査において分析は行っていない。

② 依頼相手

依頼を行った相手との関係を尋ねる項目であった。予備調査から、依頼相手カテゴリを選択肢として設定した。そして、その選択肢から1つ選ぶように回答を求めた。選択肢は以下のとおりである。

1) 家族(父/母/保護者に相当する人/兄弟姉妹など) 2) 友人 3) 恋人(彼氏/彼女) 4) 部活・サークルなどの仲間 5) 先生(講義担当者/所属ゼミの教員/指導教員など) 6) アルバイト先の人 7) ①～⑥以外の人(たまたま居合わせた人/知らない人)

③ 人間関係距離

②の依頼相手に対する認知要因のうち、人間関係の社会的・心理的距離を尋ねる項目であった。対人認知の項目は菊池(1997)、井出(1990)、生田(1997)の待遇行動としての依頼表現の規定因を参考に以下の5項目を設定し、1～6段階で評定を求めた。

「知人度」「1:全く知らない」～「6:非常によく知っている」、「親密度」「1:全く親しくない」～「6:非常に親しい」、「親しみやすさの程度」「1:非常に親しみ難い」～「6:非常に親しみやすい」、「近づきやすさの程度」「1:非常に避けたい」～「6:非常に近づきやすい」、「相手との関係を維持する程度」「1:非常にギスギスしてもかまわない」～「6:非常に円滑にしたい」。

④ 依頼内容のコスト

③と同様に、依頼相手に対する認知要因として、依頼内容のコストの程度を相手との関係においてどのように認識しているのか、また、相手にどのように認識されると思われるかを尋ねる項目であった。人間関係距離と同様の規定因を参考に以下の3項目を設定し、1～5段階で評定を求めた。

「依頼の頼みやすさ、または、頼みにくさ」「1:非常に頼みやすい内容」～「5:非常に頼み難い内容」、「相手に与える負担度」「1:非常に負担の軽い内容」～「5:非常に負担の重い内容」、

「承諾度」「1:絶対に引き受けてくれるだろう」～「5:絶対に断られるだろう」。

⑤ 「依頼方略」の尺度評定

態度構造の要素のうち行動を測定する尺度であった。依頼の方略を行動とし、日本社会において指摘されている文化的思考や行動パターンを相反する概念を観点として尺度化を行った。それらの26項目に対して「1:全く当てはまらない」から「6:非常に当てはまる」の6件法で回答を求めた。

⑥ 「二面性」尺度

態度構造の要素のうち感情を測定する尺度であった。前出の予備調査から相反する語義、概念をもつ感情表現6項目を尺度化し、「二面性」尺度とした。そして、それらの項目に対

して「1：全く当てはまらない」から「7：非常に当てはまる」の7件法で回答を求めた。

3.3 依頼表現のカテゴリ化

本調査の分析は、SPSS for Windows Ver.16.0Jを用いて行った。

まず、依頼表現をカテゴリにしたがって分類した。分類を行った表現は①の記述から、その依頼内容に対して直接依頼に言及している表現を対象とした。意味・機能、形態による表現のカテゴリを表1に示す。カテゴリ(ca)1, 14, 15は、直接的な要求によって依頼を表わし、それ以外は間接的な依頼表現である。また、カテゴリ2, 10, 13は遠慮を表す機能をもった、より間接的な表現である。次に、「人間関係距離」と「コスト」夫々の合計得点の標準化を行った。さらに、「対人方略」と「二面性」尺度に対して因子分析を行い、因子得点を算出した。その後、依頼表現のカテゴリ、および、標準化得点と因子得点を変数としたTwoStep法によるクラスタ分析を行った。TwoStep法を用いた理由は、カテゴリ変数と量的変数を同時に扱える点にある。なお、TwoStep法はクラスタ数が自動的に算出される。

4. 結果と考察

4.1 依頼表現の類型化

前出の表1の【依頼表現記述】は、自由記述によって得られた回答の一部を該当するカテゴリに分類した結果である。

4.2 依頼相手に対する認知要因

認知要因であるの関係である「人間関係距離」と「コスト」の結果を示す。まず、依頼相手に対する社会的・心理的距離を人間関係距離得点として算出した。その結果、平均値は24.91(最小値5, 最大値30, SD=4.44)であった。次に依頼内容が相手に与える負荷の程度をコスト得点として算出した。調査対象者各人の経験した依頼という分析対象としたため、その操作上、認知要因の「人間関係距離」は比較的親密で、「コスト」は中程度であったと考えられる。

4.3 行動要因の構造

依頼に伴う行動要因の「対人方略」の構造を分析するために因子分析を行った。まず、顕著なフロア効果のみられた2項目「13. 頼みたいことを命令口調で伝えた」と「21. 他にも頼める人がいないか、探してもらうこともあわせて伝えた」を分析から除外し、残りの24項目に対して主因子法、Promax回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況(4.68, 2.85, 1.95, 1.36, …)と因子の解釈可能性を考慮すると3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して因子分析(主因子法, Promax回転)を行った結果を表2に示す。表2で示されているように、.40以上の因子負荷量を示した項目を各因子の下位尺度として採用した。なお、回転前の3因子で24項目の全分散を説明する割合は39.53%であった。

表1 依頼表現カテゴリと該当する表現の記述

ca	依頼表現カテゴリ	意味・機能 ＜形態＞	【依頼表現記述】
1	ノート見せて 見せてくれ 見せてほしい	要求 願望 ＜常体＞	洗ったもの干しといて
2	見せてほしい <u>んだけど</u>	＜常体＞	弁当作ってほしいんだけど
3	借りていい？ ノートいい？	許可要求 ＜疑問＞ ＜常体＞	ケータイかえていい？
4	借りていいですか？	＜疑問＞ ＜丁寧体＞	(メールよりも) 電話していいですか？
5	…できますか？	＜丁寧体＞	実験に参加することはできますか？
6	借りてもよろしいでしょうか？	＜敬体＞	(調査協力のための) 説明をしてもよろしいでしょうか？
7	見せてくれる？ 見せてもらえる？	授受 受益 ＜肯定疑問＞ ＜常体＞	エアコンつけてくれる？
8	見せてくれない？	＜否定疑問＞	迎えに来てくれない？
9	見せてくれませんか？ 見せてもらえませんか？	＜丁寧体＞	(シフトの時間を) 代わってもらえませんか？
10	見せてもらいた <u>い</u> んですが 見せてほ <u>し</u> いんですが	＜肯定疑問＞ ＜丁寧体＞	(シフトの時間を) 代わってもらいた <u>い</u> んですが
11	見せていただけますか？	＜肯定疑問＞ ＜敬体＞	(アンケートに) お答えいただけますか？
12	見せていただけませんか？	＜否定疑問＞ ＜敬体＞	(実験に) ご協力いただけませんか？
13	見せていた <u>だ</u> きたいんですが	＜敬体＞	(テーブルとイスを) 配置して <u>いた</u> だきたいんですが
14	見せてください	＜丁寧体＞	安くして下さい
15	…お願いします	[慣用表現]	(電球の型がわからないので) お願いします
16	ノート貸してよね 貸してほ <u>し</u> いな 貸してよ	[終助詞] 同意要求 ＜常体＞	今日はおまえのおごりですよ 手伝ってくれるかな ちょうだいよ

第Ⅰ因子は7項目で構成されており、負荷量の高い項目は「相手を気づかいながら伝えた」「悪いんだけど”申し訳ないのですが”など、お詫びをするように伝えた」「相手の態度や顔色をうかがいながら伝えた」「頼みたい内容を相談するように伝えた」「相手に悪く思われぬように取り繕うように伝えた」「頼みたい理由を説明しながら冷静に伝えた」「頼みたいことを話し合うような方法で伝えた」であった。したがって、この因子は相手に対する配慮や図々しさへの懸念から生じる遠慮の行動を表し、自分の利益と相手のコストへの調和を図る因子と解釈された。そこで、この因子は「調和呈示型遠慮」と名づけた。

第Ⅱ因子は8項目で構成されており、負荷量の高い項目は「嫌味や皮肉を言うように伝えた」「相手のご機嫌を取ったり、お世辞を言ったりするように伝えた」「“メシ!”のように頼みたいことを単語だけ(一言)で伝えた」「頼みたいことを遠まわしに伝えた」「相手を非難しながら怒るように伝えた」「頼みたいことを感情的に伝えた」「頼みたいことをさりげなく伝えた」「ギャグっぽく、冗談を言うように伝えた」であった。これらの項目の多くは第Ⅰ因子とは対照的に行動に一貫性が無く、自分勝手に相手への配慮も希薄な行動を意味する因子と解釈された。そこで、「不均衡型利己」と名づけた。

第Ⅲ因子は4項目で構成されており、負荷量の高い項目は「頼みたいことを率直に伝えた」「頼みたいことを正直に伝えた」「頼みたい内容だけと言って伝えた」「相手の反応は見ないで一方的に伝えた」であった。これらの項目は第Ⅰ因子や第Ⅱ因子で表れていたような感情的な印象や間接性を排除した直接的な行動を表す因子と解釈された。そこで「単刀直入」と名づけた。また、内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ「調和呈示型遠慮」で $\alpha = .79$ 、「不均衡型利己」で $\alpha = .69$ 、「単刀直入」で $\alpha = .57$ 、という値となった。

4.4 感情要因の構造

感情要因である6項目の「二面性」尺度に対して因子分析(主因子法, Promax 回転)を行った。固有値の減衰状況(3.44, 1.06, 0.47, …)から明らかな2因子構造であった。表3にその結果を示す。

第Ⅰ因子は4項目で構成されており、負荷量の高い項目は「私は図々しい」「私は厚かましい」「私はわがままで」「私は迷惑をかけている」であった。したがって、この因子は相手への心遣いや気配り欠けた感情を表していると解釈された。そこで「非礼」と名づけた。

第Ⅱ因子は「私は控えめにした」「私は遠慮した」の2項目で構成されており、第Ⅰ因子の非礼を抑制する感情を表していると解釈できるため、「配慮」と名づけた。また、2つの因子間には比較的強い正の相関が認められたことから、非礼と配慮は「二面性」としては依頼時に同時に生起する感情であるという結果が得られた。

表 2 依頼方略の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

因子	項目内容	I	II	III
調和呈示型遠慮 ($\alpha=.79$)	26.相手を気づかないながら伝えた	.70	-.06	-.07
	12.「悪いんだけど」「申し訳ないのですが」など、お詫びをするように伝えた	.69	-.16	-.10
	20.相手の態度や顔色をうかがいながら伝えた	.58	.10	-.10
	01.頼みたい内容を相談するように伝えた	.56	.02	.10
	18.相手に悪く思われないように取り繕うように伝えた	.56	.10	-.04
	14.頼みたい理由を説明しながら冷静に伝えた	.55	-.08	.08
	16.頼みたいことを話し合うような方法で伝えた	.52	.12	.06
	09.頼みたい内容を説得するように伝えた	.34	.33	.31
	17.嫌味や皮肉を言うように伝えた	-.12	.58	-.05
	24.相手のご機嫌を取ったり、お世辞を言ったりするように伝えた	.31	.54	-.05
不均衡型利己 ($\alpha=.69$)	15.「メシ！」のように頼みたいことを単語だけ(一言)で伝えた	-.35	.54	.14
	25.頼みたいことを遠まわしに伝えた	.13	.50	-.22
	06.相手を非難しながら怒るように伝えた	-.13	.47	-.04
	22.頼みたいことを感情的に伝えた	.15	.46	.15
	23.頼みたいことをさりげなく伝えた	.03	.44	-.09
	10.ギャグっぽく、冗談を言うように伝えた	-.17	.43	-.05
	04.第三者にお願いして頼んでほしいことを伝えた	.20	.38	.05
	07.相手の良いところを強調しながら伝えた	.18	.38	-.09
	05.頼みたいことをそれとなく伝えた	.14	.31	-.07
	03.お互いこ心を許し合っていることを強調しながら伝えた	.05	.23	.18
単刀直入 ($\alpha=.57$)	19.頼みたいことを率直に伝えた	-.01	-.16	.63
	11.頼みたいことを正直に伝えた	.27	-.22	.60
	08.頼みたい内容だけを言って伝えた	-.15	.04	.51
	02.相手の反応は見ないで一方的に伝えた	-.22	.26	.42
因子間相関		I	II	III
		I	-.23	-.26
		II	-	-.12

表 3 「二面性」感情の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

因子	項目内容	I	II
非礼	4.私は図々しい	.92	-.07
	2.私は厚かましい	.80	.08
	6.私はわがままで	.75	-.08
	1.私は迷惑をかけている	.56	.23
配慮	5.私は控えめにした	-.07	.85
	3.私は遠慮した	.06	.74
因子間相関		I	II
		-	.57

4.5 社会的態度の構成要因と依頼表現の構造

社会的態度を構成する全ての要因と依頼表現の TwoStep クラスタ分析の結果を表 4 と図 1 に示す。依頼表現の偏りはすべてのクラスタにおいて有意差が認められた ($p < .01$)。なお、依頼内容に対して直接依頼に言及していない表現は 16 例であった。

表 4 各クラスタにおける依頼表現とカテゴリの分布状況

cl	ca	依頼表現記述	N
1	1	駅まで送って	113
	7	洗っといてくれる？	23
	8	実家から持ってきてくれない？	10
	2	物理のレポート教えてほしいんだけど	1
		(言及無し)	3
2	7	過去問貸してくれる？	41
	16	20分遅らせてほしいな	39
	3	車使っていていい？	33
	2	コピーさせてほしいんだけど	31
	8	小銭貸してくれない？	21
	9	物理を教えてくださいませんか？	21
3	14	日程を教えてください	24
	10	〇〇から××に変更してほしいんですが	13
	15	担当の先生をお願いします	12
	12	提示していただけますか？	11
	11	代わっていただけますか？	6
	13	時間をずらしていただきたいんですが	6
	5	他の日にかえることはできますか？	5
	4	作ってもらっていていいですか？	4
	6	移動をお願いしてもよろしいでしょうか？	3
	(言及無し)	13	

まず、クラスタ1 (N=150) では、社会的態度を構成する「認知」「行動」「感情」の全ての要因において有意差を得た (コストのみ $p < .05$)。相手との人間関係距離が親密、かつ、相手への負担が小さいという認知のため、非礼、配慮ともに二面性の感情が低く、調和呈示型遠慮方略が抑制され、不均衡型利己と単刀直入方略が高いという行動要因の特徴をもったクラスタであった。したがって、これらの社会的態度から、依頼表現も常体の直接的表現が多く用いられていた。

次に、クラスタ2 (N=186) では、感情要因と行動要因のうち、調和呈示型遠慮と単刀直入方略に有意差を得た ($p < .01$)。しかし、認知要因と不均衡型利己方略には、有意差は認められなかった。つまり、依頼相手への人間関係や負担への認知は無いが、感情的には、アンビバレント性を示しているため、単刀直入方略を回避し、遠慮を呈示したと考えられる。したがってこれらの特徴から、形態は常体であるものの、受益の意味、願望や許可、同意要求の機能による間接的な依頼表現が用いられていた。

最後にクラスタ3 (N=97) では、認知要因のうちのコスト、行動要因のうちの調和呈示型遠慮及び、不均衡型利己に有意差を得た ($p < .01$)。しかし、人間関係距離と感情要因に優位さは認められなかった。つまり、疎遠な相手への依頼であったため、利己的な方略は抑制され、遠慮方略が用いられていた。依頼表現においても丁寧体や敬体、遠慮を表す機能を有する表現、また、依頼の慣用性が高い表現が用いられていた。この社会的態度と依頼表現の関係は、疎遠な相手への慣用表現の使い勝手の良さを表していると考えられる。

以上、クラスタ内とクラスタ間の性格によって2つの仮説が部分的に実証された。またその一方で異なる側面をもつ特徴も得られた。つまり、クラスタにおいて各要因の有無の存在である。しかし、換言するならば、各要因の特徴とその反映である表現の細かな使い分けの関係が実証的に分析されたと考える。

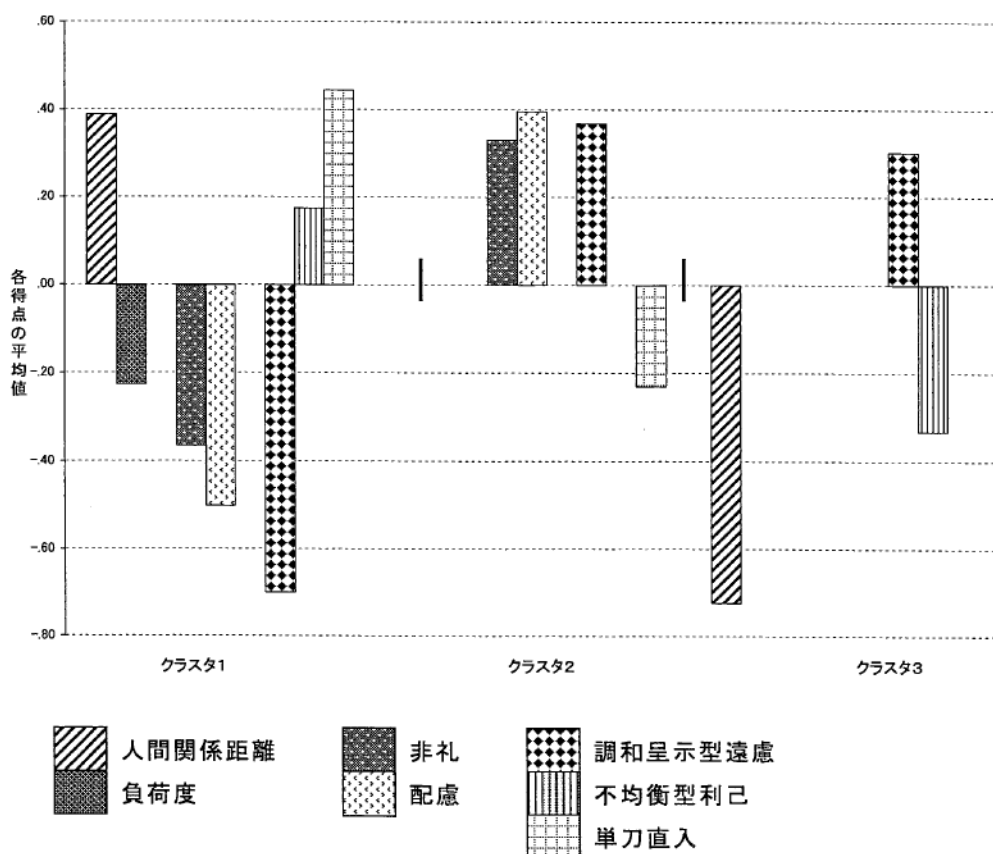


図1 クラスタ毎の各得点の平均値 (有意な平均値のみグラフ化)

参考文献

- 安藤清志 他 (2007) 「態度」『キーワードコレクション 心理学』 重野 純 (編) 新曜社
- 安藤清志 (2003) 「態度と態度変化」『現代心理学入門 4 社会心理学』 安藤清志・大坊郁夫・池田謙一 (編) 岩波書院
- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『言語』 26 (6) 66 - 71 大修館書店
- 井出祥子 (1990) 『講座 日本語と日本語教育 言語学要説 (下)』 近藤達夫 (編) 明治書院
- 井出祥子・生田少子・荻野綱雄 他 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合—』 南雲堂
- 岡本真一郎 (2000) 『ことばの社会心理学』 ナカニシヤ書店
- 川口義一・蒲谷 宏・坂本 恵 (2004) 『敬語表現』 大修館書店
- 菊池康人 (1997) 『敬語』 講談社
- 竹内靖雄 (1995) 『日本人の行動文法』 東洋経済新報社
- 砂川有里子 他 (2001) 『日本語文型事典』 グループ・ジャマシイ (編) くろしお出版
- 土居健郎 (1985) 『表と裏』 弘文堂
- (2000) 『「甘え」の理論展開 土居健郎選集 2』 岩波書店
- (2007) 『「甘え」の構造』 (増補普及版) 弘文堂
- 中川裕志・小野 晋 (1996) 「日本語の終助詞の機能: 「よ」「ね」「な」を中心として」『自然言語処理』 3 (2) 3-18 言語処理学会
- 中根千枝 (1982) 『タテ社会の人間関係』 講談社現代新書
- 原 奈津子 (2004) 「社会的態度」『新編 社会心理学』 堀 洋道・山本真理子・吉田富二雄 (編) 福村出版
- 南 博 (1980) 『日本人の人間関係事典』 講談社
- 宮地 裕 (1995) 「依頼表現の位置」『日本語学』 10 (4) 4-11 明治書院
- 山口 勲 (2006) 「態度の変容」『現代社会心理学』 末永俊郎・安藤清志 (編) 東京大学出版会

※ 本稿は以下の研究大会にて発表した内容に加筆, 修正を加えたものである。

社会言語科学会 第26回大会 2010年9月4日(土)・5日(日) 於:大阪大学